恩納村を支えた医師たち

今年は新型コロナウイルスの影響を受け、村民の方々からの聞き取り調査が難しく、話を伺えないことを寂しく思っています。今回は恩納村にはいつごろから医師がおられたのかを調べてみました。

戦前は現在のような医療体制はなく、医師も恩納村には一人で、薬局もありませんでした。恩納村の場合は大正期になってから、徒歩や自転車で薬売りの方がガランガランと鈴を鳴らして訪れるようになったそうですが、ほとんどの病気やケガも、民間医療に頼っていました。

明治以前の沖縄県の各地域には、医師は置かれていませんでしたが、1900（明治33）年、県令第四十号「間切島医に関する規定」が制定され、各間切に医師を置くこととなりました。恩納村内では恩納と前兼久が県から医師の配置を指示された場所となりました。

戦前の恩納村医	
1	氏名不明
2	大嶺達沢
3	福山精三（清三）
4	土持綱利
5	當山昌隆
6	知念誠太郎
7	當間恵福
8	新嘉喜倫元
9	金城精一

『恩納村誌』によりますと、「最初の村医（村雇医）は奄美大島篠川村出身で、医師夫婦と娘の三人家族であった。佐渡山家に宿していた。」とあります。しかし残念ながら、前兼久に医師が派遣されたかはわかりません。

当初は県外から派遣していたようですが、1907（明治40）年頃からは県の「医生養成所」で学んだ、内務省の医術開業免状を得た医師が増えはじめます。村内二番目の医師はこの医業開業試験に合格した那覇出身の大嶺達沢という方でした。この方も佐渡山家にいて、そこで診療も行っていたそうです。

1910（明治43）年に赴任した沖永良部島大城村落出身の土持綱利という方は、1918（大正7）年頃まで、恩納ノロ殿内前の屋敷に居住して診療していたそうです。この方については給料の記録があり、当時月五十円だったようで、国頭郡内の医師の中で最高給の医者でした。

村医の中には地域の事業に関わられた方もいます。1921（大正10）年に赴任した知念誠

村診療所と医師住宅　金城医師家族